あいさつ

岡山実験動物研究会の近況

会長　猪　　貴　義

岡山実験動物研究会が誕生して，早や5年目を迎え，ここに研究会報第5号をお届けすることができるようになりました。今日を迎えることができましたのは，関係者の本会に対する深いご理解と，ご協力，ご支援によるもので，この機会に，関係者に厚くお礼申しあげます。

お蔭をもちまして，岡山実験動物研究会の運営はほぼ軌道にのってまいりました。年3～4回，定期的に開催される研究会も，それぞれの機関代表者のご協力をいただいて，順調に，かつ，活発に進められてきております。

年1回刊行される機関紙「岡山実験動物研究会報」は，実験動物，動物実験に関する総説，主張，提言，紹介（実験動物，動物実験法，実験手技，施設，新刊図書など）を取扱い，その内容は次第に充実してきたようにみられます。

また，大学間，学部間，研究機関のわくを越えて，お互いに話し合える状況ができ，一部，学部間にわたる共同研究の動きもでてまいりました。

以上のような状況をさらに推進することによって，本会設立の目的は達成されるものと考え，一層の努力を傾けるつもりでおります。関係各位のご協力を引続きお願いする次第です。

われわれの研究分野において，21世紀にむけて推進すべき総合科学技術として，ライフサイエンスがとりあげられ，その検討が進められています。現在，ライフサイエンスの定義や内容をめぐって，なお，多くの論議が行われていますが，大方の共通理解としては，生物学，医学，薬学，農学，工学，さらに，これら関連基礎学を含む広範な学問分野の知識を総合して生物のもつ巧妙複雑な生命機構を解明し，その成果を将来における人類の生存と人間生活の向上発展のために役立てようとするものとみられています。今日，個別科学の発展から，個別科学の総合の時代を迎えつつあります。

生命現象全般を総合的立場から解明しようとするライフサイエンス研究にとって実験動物の果す役割は極めて重要とみられています。研究素材としての実験動物の適，不適は研究成果に直接影響を与えることになります。将来，さまざまな研究に対応した多種，多様な実験動物の種と系統が開発され，準備される必要があります。例えば，各種の近交系，mutant 系，ヒト疾患モデル動物の開発と，それぞれの生物学的特性について組織的検討を加えることが大切です。また，発生工学的手法，遺伝子工学的手法を用いたキメラ動物，単為発生動物，クローン動物，遺伝子導入動物など新しい実験動物の開発と，それらの有効利用についても検討を加えることが必要であります。

実験動物を用いた発生工学，遺伝子工学研究は，目下，日進月歩の状況にあり，動物実験にたづさわる研究者自身も，このような状況に注目しておく必要があろうかと考えられます。実験動物や動物実験法に関する多くの知識や情報なしでは，すぐれた研究成果をあげることが困難な時代となってまいりました。

以上のような状況のもとで，本研究会の果す役割は今後，一層重要となってくるものとみられます。会員相互で十分に話し合い，力を合わせて，本研究会の発展をはかってゆきたいものと念願しております。関係各位には，本研究会発展のために，引続きご鞭撻とお力添えたまわりますよう重ねてお願いする次第です。なお，事務局は医学部より農学部（〒700，岡山市津島中1丁目1－1，岡山大学農学部家畜育種学教室内，Tel. 0862-52-1111，内線735，736）に移りました。会務に関すること，その他，遠慮なくご連絡下さい。